

JRA認定競走／(株)優駿協賛／河北新報杯

第53回 南部駒賞 （Ｍ１）
（ジュンライトボルト賞）

水沢競馬場／2歳・ダート1600m

11月15日（日）第12競走　18：05発走

南部駒賞の前身である『南部駒賞典』は1973年創設。ひと足早く誕生していた『不来方賞典』などの特別競走の好評を受けて、この年『みちのく大賞典特別』と同時に新設されました。その最初の勝ち馬は旧3歳牝馬のカネシラン、当時の1着賞金は40万円でした。
その後1975年に重賞競走に格上げ。2000年第28回からは東北3県交流、2004年からは地方競馬全国交流重賞となり、翌春の飛躍を目指す若駒達の登竜門的競走として歴史を積み重ねてきています。昨年は盛岡競馬場で行われましたが今年は2年ぶりの水沢競馬場での実施となります。

■セイカールトン（牡2 岩手・板垣吉則厩舎）



ここまで5戦連続で重賞に出走、そこで2勝2着2回3着1回の結果を残しているのだから地力はやはり岩手の2歳世代で上位といえるものを持つ。一方で重賞2勝はいずれも芝1600ｍ。ダート重賞では2着に留まっているのも確かだ。ひとつ変化を期待できる要素は距離。ここまでのレースからは1400ｍよりは1600ｍの方がより戦いやすそうな印象を受ける。ベストではないまでもベターな距離になる今回はダートといえど軽視できない存在になっていい。

> 芝の方が良い戦績だけどダートでの調教の動きに遜色はないから芝馬だと決めつけたくはない。体調面も良好だし、もうワンパンチがあれば。（板垣吉則調教師）

■ツリーオブライフ（牝2 北海道・角川秀樹厩舎）



デビューは4月15日、門別競馬開幕日を飾る2歳新馬戦『スーパーフレッシュチャレンジ』で2着の結果を残す。その後は一進一退しつつも常に上位を争うまでに成長してきたここまでの走りから見た力量は門別2歳世代の中でも上位といえるもの。一方で勝った3勝がいずれも1000ｍという事で分かるようにスプリントがベストのイメージも強い。ただ、前走にしても快速セルアウトクラウドが存在した影響は大きかった。超強力先行馬がいないここならマイルでも力を発揮できる可能性は十分。

初距離になるし1000mがいい印象もありますが状態は問題無く遠征できます。距離に関してはやってみないと分からないでしょうしね。期待をしています。（角川秀樹調教師）

■ベストプラージュ（牝2 岩手・飯田弘道厩舎）



デビューから5戦を戦ったダートでは2着が最高だったが芝に転じて一変、若鮎賞・ジュニアGPではセイカールトンに及ばなかったまでもいずれも2着を確保したし、芝マイルの認定戦では初勝利を挙げることもできた。JRAアルテミスSに挑戦した前走も含めてやはり“芝馬”の手応えが強まっただけにダートでどれだけ戦えるのか？が今回の課題であり乗り越えるべき点。いずれはまた芝路線に進むとしてもまだしばらくはダートで戦わなくてはならない。今回は先々の選択肢を大きく拡げるための挑戦でもある。

遠征後でも疲れはなく挑めます。この先の路線のことも考えてダートのマイルを選択しました。ここでの走り次第で来年の選択肢も拡がるでしょうからね。（飯田弘道調教師）

■プライベートセクタ（牡2 北海道・川島洋人厩舎）



5月21日の新馬戦で初勝利を挙げてからは勝ち星を増やせずにはいるが、ここ2戦は重賞で連続入着圏確保など同世代の中では安定して上位の力を発揮している。新馬戦にしても後々重賞級の活躍を見せるタルマエドンを破っての勝利だったのだから、その後も世代の強豪と一進一退の戦いを演じてきた地力は当初から発揮していたという評価で良いはずだ。どちらかといえば短距離実績が厚めの今回の門別勢の中では1700ｍや1800ｍ、中距離のいわゆる一周競馬を複数回経験してるのも強みになる。待望の重賞タイトル獲得も目前。

調教の動きや反応がよく状態も良くなってきていると思います。輸送や初コースもありますが、ここでは力関係だけだと思っています。（川島洋人調教師）

ゴーゴーミツヒコ（牡2 北海道・田中淳司厩舎）



6月のデビュー戦をはじめここまでの6戦全てで1700ｍ以上を選択してきたキャリア。勝ち星こそひとつにとどまってはいるが、これは長めの距離で強い相手との戦いを選んできたゆえの結果であって着順の数字がイコール本馬の力量では決してないはずだ。ただ、差のない競馬をした相手に次戦では大きく離されるなど上下の振幅がやや大きめな印象もある。ここで一番良い走りができるのであれば上位争いに食い込んできても不思議はない。デビューからずっと1700ｍ以上を選択してきた距離経験にも期待してみよう。

状態面は安定していますしここまで長めの距離を走ってきた経験もあります。ただこのメンバーでは、ちょっと相手が強い感じですね。（田中淳司調教師）

エイシンフロイデ（牡2 北海道・村上正和厩舎）



デビューから初勝利までは3戦を要したがいずれも世代上位の素質馬と戦っての結果。本馬の力量を着順の数字だけで測るのは避けるべきだろう。その一端が現れたのが前走の鎌倉記念。いわゆる“初物づくし”もあって単勝は9番人気にとどまったものの、直線最後方付近から2着に食い込んでみせるなかなかの結果。厳しい条件でもそれだけ戦えるのが本馬の素質であり地力と言えるはずだ。「本格化するのは来年（村上正和師）」と評価される彼だが、重賞タイトルには周囲が思っている以上に近づいているのかもしれない。

まだ幼い面があって本当に良くなるのは来春かなと思うが、今回は調教でしっかり動いてくれている。それが良い結果に繋がってくれればいいね。（村上正和調教師）

■タカマキエイト（牡2 岩手・菅原右吉厩舎）



2回目の重賞に挑んだ前走・ネクストスター盛岡では9着。前走も7着ではあったが上位争いからは大きく離された･･･という近走からは評価が少し難しくなった感が否めない。しかしながらデビューからの数戦の内容が決して悪くなかったという評価は変わらないし馬体重が増加傾向にあるのも成長とみていいだろう。この馬なりの進境を見せているという事であれば、どこかに巻き返すきっかけがないか？を見いだしてみたいところだ。まずは今回の戦いぶりに注目。

調教の動きなどは変わりなく良いのですが近走の結果がもうひとつ。馬体面とかもう少し成長を待たなければならないのかもしれませんね。（菅原右吉調教師）

■リュウノジェット(牡2 岩手・板垣吉則厩舎)



5月のデビューから8月までは門別で戦って岩手に移籍、その転入初戦を1着で飾っている。本馬も門別では長めの距離を選択してきており、若駒賞の5着もその距離経験が活きたとみて良さそう。一方で、旧地での対戦成績で考えると今回の門別からの遠征勢に対してはやや差を付けられ気味だったのも確か。ひと足先に岩手に来て水沢コースの経験を積んでいる点、勝ち星を増やした経験値。それらをアドバンテージとして活かし切りたいところ。

動きは変わりなく良いですね。ただ、門別時代に戦っていた相手と比較して、ここはちょっと相手が強いかなと感じます。(板垣吉則調教師)

■ダブルゲーム(牡2 北海道・角川秀樹厩舎)



5月の新馬戦を圧勝し2戦目の重賞、門別2歳馬の"伝統の一戦"といえる栄冠賞をも勝ち切って一躍世代トップの座に踊り出た。その後は勝ち星を増やせていないが、例えば2走前のネクストスター門別にしても2着争いの中では僅差の6着を確保したし、前走は相手関係だけでなく距離も長かっただろう厳しい条件の中で大きく崩れなかったのはやはり栄冠賞馬らしい地力と評価したいもの。なにより気配的なデキ落ち感はここまで全く無い。ここなら一変の走りを見せておかしくはない。

元々能力はあると思っていた馬ですから前走からの間隔があまり無いのですが遠征することに。前走でコーナー4つの競馬をした経験もここで活きてくれそうです。(角川秀樹調教師)

■サンエイフローラ(牝2 岩手・畠山信一厩舎)



ここまで3回連続で重賞に挑戦して着順は4着、8着、10着と後退気味。前走時にも触れたが、デビューからの3戦を2勝2着1回でまとめた走りの内容からすればここまでの重賞でも上位に食い込んでおかしくない印象があっただけに、ここ3戦にやや物足りなさを感じるのは正直否めないところ。距離に関してもどちらかといえば短い方が良い印象。ここでは2度目の1600ｍがチャレンジすべき部分になるだろう。ビギナーズCの4着には十分な見どころがあった。マイルであの走りが再現できれば。

どこからでも動ける馬なのでそこは強みになっていい。ただマイルは少し長いかもしれないですね。(畠山信一調教師)

ベラジオエヴァンス（牡2 岩手・齋藤雄一厩舎）



デビューは門別、7月の新馬戦を勝って岩手に移籍。転入初戦となったビギナーズCで3着に食い込んで岩手でも順調な滑り出しを見せた本馬。旧地での能力検査でものちの重賞勝ち馬と差のないタイムで走っていたのだから備える素質は決して低いものではないし、前走時にも触れたように450kgくらいで若干線の細さを感じた馬体が460～470kgあたりになってきたのも好材料。今が成長期ということであれば、レース経験を積んで馬体も成長することでもっと違った結果を手にしてくれる馬ではないだろうか。

前走後も変わりなく調整できている。ここまでのレースからは小回りの方が戦いやすそうに感じるので水沢に替わっての変化に期待したい。（齋藤雄一調教師）

■バッチリ（牡2 大井・福永敏厩舎）



写真提供：H.Manabe

9月1日のデビューは今回の出走馬中で一番遅いもの。3戦のキャリアも一番少ないが、前走の、結果こそ2着だったが一気の距離延長にも対応した走り、それも既に重賞で上位に入着している馬相手に食い下がった内容は非常に中味が濃いものだった。「馬ごみの中でキックバックに我慢して距離にも対応してくれた。これなら次はもっと･･･という手応えがありました（福永敏師）」と陣営が感じる手応えも十分だった。初遠征に加えて初重賞挑戦は決して楽な条件ではないが、ここでの戦いは本馬の伸び代をさらに大きく引きだしてくれるはずだ。

マイルでの前走の内容が良かったですし、いろいろな経験をさせたいと考えての遠征挑戦。馬自身の成長も感じる点にも期待しています。（福永敏調教師）

文・特記無き写真／横川典視